

創刊のご案内

UPU

# AI 月刊

12月創刊!!

AI (Artificial Intelligence=人工知能)  
の専門誌が遂に誕生します。  
1985年暮、UPUからお届けします。

AIジャーナル  
創刊のごあいさつ

今世紀最大の技術革新は、コンピュータを中心とするものです。ハードウェア技術のめざましい進歩、ソフトウェアの蓄積、通信技術との融合を通じて、さらに大きな社会変化を創り出しつつあります。こうしたコンピュータ技術の初源は、人間の知的活動を機器によって実現しようというところにあります。AI(Artificial Intelligence=人工知能)と総称される一群のテーマは、こうした夢のいくつかを現実のものとしていく試みです。しかも従来とは次元の異なるコンピュータ技術を創成するものです。揺籃期を過ぎ、現実の開発テーマとして、あるいはビジネスシーズとして本格的な成長を迎えたAI。「AIジャーナル」は、最先端に取り組むすべての人びとの雑誌です。AIを科学と技術の両面から捉える総合誌、「AIジャーナル」に熱い期待をお寄せください。






# 百家争鳴で、 AIは「最終科学」を目指す

AIジャーナル

人工知能研究は、最終科学たりうるか。

AI研究の初発の問いであり、『AIジャーナル』の基本的なモチーフです。なぜならば、人工知能の研究は、同時に、自然知能に対しての、深い洞察と解析が求められているからに他なりません。現在、AIを狭義に理解すれば、知識工学や次世代マシン開発、あるいは認知科学と呼ばれる領域です。しかし、これはあくまでも現時点でのAI開発のパラダイムであって、むしろアリストテレス、デカルトあるいはチューリング以降の見果てぬテーマが、広義のAIが扱う課題だと考えます。このとき、AIは、新しい総合科学技術の別称として登場するはず。『AIジャーナル』は、現実に行進するAI開発の動向を鋭くキャッチすると同時に、知能とは何か、知識とは何か、をめぐる広範なアプローチを展開します。百家争鳴こそ、AI研究の重要な資源だからです。

A R T I F I C I A L



# 「日本型AI」を主張する 総合メディア

## AIジャーナル

技術は、技術者の自己表現である――。

この自明なことが問われないうちに、「技術論」が語られてきました。わが国の技術と技術者を取り巻く環境は、How（いかに）を問うことはあっても、What（何の為に）やWhy（なぜに）を根源から問うことはタブーだったのではないのでしょうか。この風土では、技術情報誌は成立しても、技術ジャーナリズムは育ちません。それは、あらゆる技術開発テーマのプロトタイプが「舶来の文物」だったからに他ならないからです。AIの現状は「舶来」です。そして、課題はその借着をどう脱いで、日本型AIを作り出すかではないのでしょうか。なぜならば、AIは他の工業技術と違って、不定形なものだからです。WhatやWhyを問うこと。これが、AIの開発にも、AI研究者にとっても、あるいはあらゆる科学・技術者にとっても、いま真に求められていることでしょう。

『AIジャーナル』は、技術表現を実現する「場」です。

A R T I F I C I A L



# AIは企業の 未来戦略の要です

## AIジャーナル

AIは、次世代のリーディング産業か。

「未来は予測するものではない。創り出すものだ」(ネグロポンティ)とすれば、人間の英知を扱うAIを中軸に産業を興すことは、人類史的な課題です。

過去20年間の「脱工業化社会」をめぐる議論は、ネットワークとインテリジェンスの結合によって、ようやく未来の産業社会像を描ける段階にきたといえるでしょう。

それはインテリジェンスを扱う産業の発生ではなく、全産業のインテリジェンス化によって突破されるべきものです。

狭義のAIの市場規模が数千億円程度であっても、AIビジネスの規模はけた違いの巨大なものとなります。

企業がAIをテーマとすること。このことが企業の未来戦略にとって不可欠なものとなる時が始まりました。

新しい技術と生産の時代に、『AIジャーナル』は創刊されます。

A R T I F I C I A L



B



# 渡辺 茂

AI—人工知能—は、  
コンピュータがつくられて以来の  
長い夢であった。

AI—人工知能—は、コンピュータがつくられて以来の長い夢であった。1950年から約35年を費やして、やっとコンピュータを最初につくったときの理想が実現しようとしている。それがAIである。

しかし視覚、画像認識の問題、音声認識の問題をはじめとして、果たすべきことは多い。さらにそのもとに知識工学とされるものがあって、論理を解明しようとしたり、人間の知識を解明しようとしているものがある。

また、発生物学や発達心理学、分子生物学の知識を使った神経科学の研究などは、AIの構成に大きな役割を果たすといえる。

また、社会は多くの人間が集まって形成している。それは、じつは一人ひとりの頭のなかに構成されているものと捉えることもできる。人間の外部と内部の同一化といった哲学的テーマを考えることもまた大きな手がかりになるだろう。

先端技術を結集して、はじめてAIは発展し、実現する。しかし人間の持つ知恵には限りがある。専門馬鹿になってひとつのことしかみえない人は、とてもAIには取りくめない。ニュートンの時代の全科学的知識よりも、現在の小専門領域の科学知識の方が多くといわれる時代だ。しかもなお、それは全体からみれば、ほんの一部にすぎない。それを克服するには、すべてのことを知ることのできる本が必要である。

「知」が流行しているようである。しかし、それが単なる風俗に流れぬためには、それを実在につなぎとめるいくつかの錨が必要である。AI（人工知能）はその一つとしての役割を果たすだろう。

また、コンピュータ・ブームは多数のマイコン少年を作りだした。彼等が将来、既存のマシンだけを操る職人に留まらず、真のテクノロジー進歩の担い手に成長するには何かが必要か。それはAIを媒介にした知の構造への好奇心であろう。それは情報処理技術そのものの高度化を意味する。

AIはこれまで基礎研究を蓄積し、その一部が実用化（ビジネス化）されようとしている。もちろん、それは歴史の始まりにすぎず、今後の基礎研究の方が圧倒的に重要である。

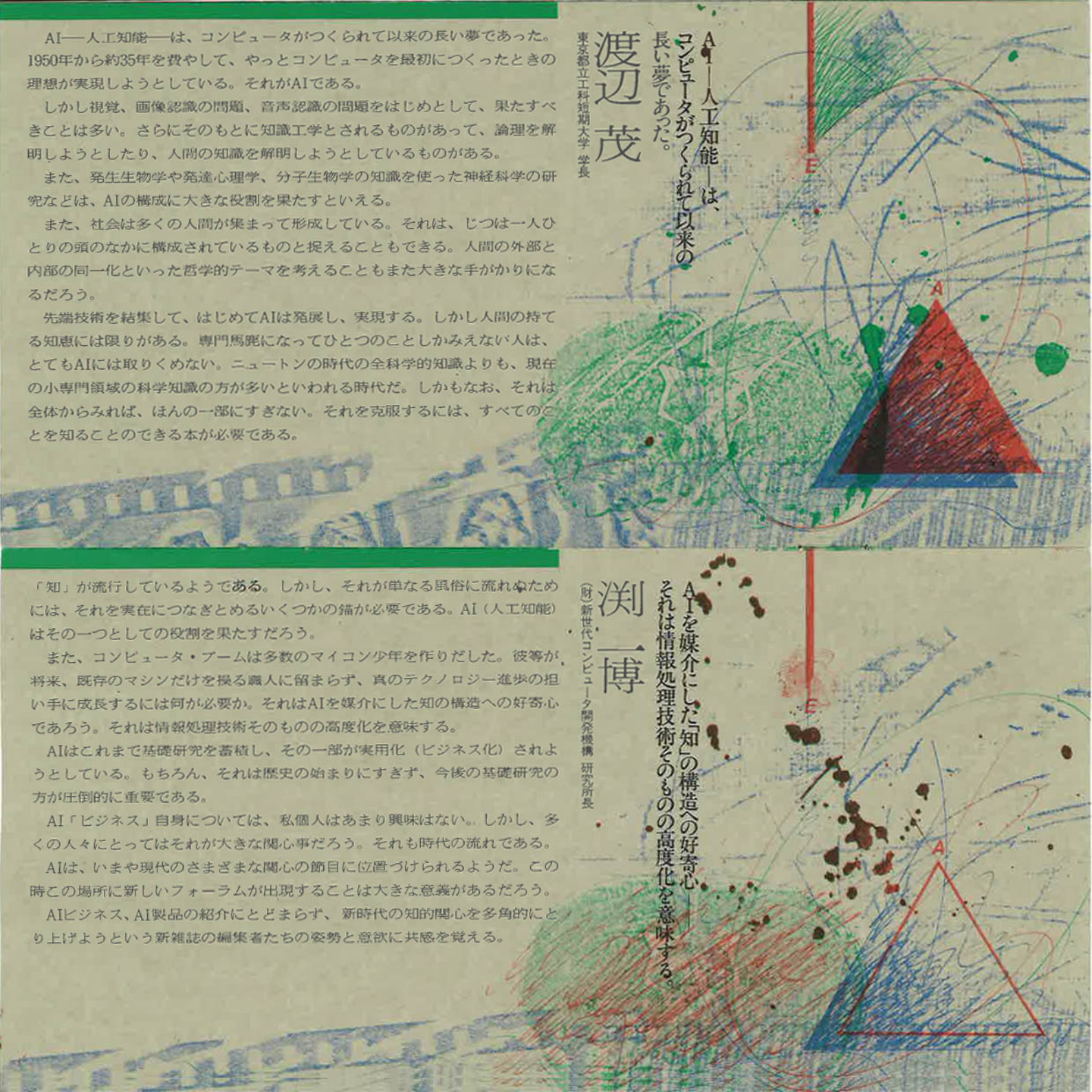
AI「ビジネス」自身については、私個人はあまり興味はない。しかし、多くの人々にとってはそれが大きな関心事だろう。それも時代の流れである。

AIは、いまや現代のさまざまな関心の節目に位置づけられるようだ。この時この場所に新しいフォーラムが出現することは大きな意義があるだろう。

AIビジネス、AI製品の紹介にとどまらず、新時代の知的関心を多角的にとり上げようという新雑誌の編集者たちの姿勢と意欲に共感を覚える。

# 刈 博

AIを媒介にした「知」の構造への好奇心  
それは情報処理技術そのものの高度化を意味する。



人工知能研究が20年余の地道な努力のあと、にわかには多くの注目をあつめ始めた。その結果このような雑誌も発行されることになったのだろうが、「人工知能」という言葉を使っている人達は「人工知能とはいったい何なのだろうか」と真剣に自分に問うていただきたい。そういった真剣な問いからしか、真の意味での人工知能は出てこないだろうから。あるいはそのような問いを発し、より良い解答を発見すべく努力をしている過程こそ人工知能なのかもしれないからである。

いずれにしても、この種の雑誌に期待したいことも、そのようなことであって、応用はまずまずだが、基礎や理論は全く弱いといわれている日本の現状に対する反省の上に、そういった方面の研究者の育成に役立つものであってほしいものである。

京都大学工学部教授

## 長尾 真

「人工知能とは何か」—— そのような問いを発し、より良い解答を発見すべく努力をしている過程こそ人工知能かもしれない。

AIという学問分野が発足してから25年以上になる。この間、AIに対する期待と失望の山谷はあったものの、その進歩は著しい。AIの研究も、計算機科学や情報工学の分野だけでなく、物理、科学、医学、法学など広い範囲で行われるようになった。いっぽうでは、企業の生産技術、オフィスオートメーションなどへの応用も始められ、AIビジネスが成立するようになった。

1979年に東京で第6回人工知能国際会議を行った時、筆者らは会議運営に参加したが、その時は世界のどこでどのような研究を行っているかを把握していたと思う。しかし、最近のAIの進展はめざましく、心理学や言語学などの境界領域も広がり、国内の状況すらつかめなくなっている。また、AIも細分化され、いくつかの専門的な学会や研究会が発足し、AI全体の動向を知ることがむずかしくなった。

この時期に、AI全般をカバーする『AIジャーナル』が発刊される意義は大きい。専門的な学会誌とはちがひ、読み易い記事が企画されているようである。AIとその境界領域の紹介だけでなく、他分野の人がAIをどのように考えているかを知ることができよう。米人工知能協会が出版している「The AI Magazine」にあるような読みごたえのある記事も欲しい。

人間の知能を上まわる機械を作ることは人類の永遠のテーマとあってよい。今後のAIの着実な発展とともに、AIジャーナルの貢献を期待する。

電子技術総合研究所 制御部長

## 白井 良明

人間の知能を上まわる機械を作ることは人類の永遠のテーマとあってよい。

人工知能が研究の対象としてだけでなく、人類社会の発展に寄与する“道具”として世に現れたのは、つい最近のことです。

しかし、その利用形態の一つである各種エキスパートシステムをみても、その分野における専門家の頭脳にも勝るとも劣らない動きには目をみはるものがあります。今後どのような分野、形態で人工知能が応用されるか、研究者ならずともその夢は広がるばかりです。

ところが、その動きがすばらしいものであればある程、私達の社会生活に与えるインパクトは大きく、人工知能を受け入れる“受け皿”が十分に整備されなくては、かえって混乱を招くことにもなりかねません。たとえば医療診断のエキスパートシステムが誤診した場合、その責任の所在はどこにあるのか、専門家の頭脳が商品として扱われることに軋轢は生じないのか……。

こうした“受け皿”づくりは一朝一夕にできるものでもなければ、また自然発生的にでき上がるのでもありません。意識的にこの“受け皿”をつくる努力が必要です。こうした折に『AIジャーナル』が創刊されたことは、誠に時宜を得た意義あることと申せましょう。“受け皿”づくりに率先して問題提起し、その動向を調査、分析することなどを通じ望ましい“受け皿”の有り方を示唆する、そうした大きな役割を『AIジャーナル』が果たすよう期待してやみません。

株式会社シー・エス・ケイ総合研究所 代表取締役社長

矢田光治

AIの広汎な利用がもたらす社会的インパクトに対して、その受け皿づくりに期待する。

12 月 10 日 創 刊 予 定

## 創刊号編集内容

- 巻頭カラー/Aha!の瞬間——工学者の発明の秘密  
第一回 西澤潤一（東北大学電気通信研究所教授）
- 特集/離陸を始めた機械翻訳  
機械翻訳のパラダイム～各企業・政府系プロジェクト～「テロルの解析」にみる究極のMT～チョムスキー理解～同時通訳者の認知過程～市場予測・海外動向
- AI商品徹底解析/パソコン・AIの相性診断
- その他、連載、座談会など多数

## AIジャーナル購読のご案内

〈概要〉

- ▶ A 4変型判 132ページ 一部カラー
- ▶ 年間6冊発行（隔月刊）
- ▶ 定価 900円（年間購読割引があります）
- ▶ 全国有名書店等にて発売

〈直接予約購読のご案内〉

- 便利な年間予約による直接購読のお申し込みを受けつけております。弊社よりご希望の住所へ直接お届け致します。
- 創刊号のみ、一冊分の直接購読を承っております。10月末日までにお申し込みください。
- また、12月末日までに'86年分年間購読を予約された方には、創刊号を無料でお届け致します。

●購読価格（送料込）

- 創刊号購読—————900円
- '86年分購読（6冊）——5,000円
- （Vol.2～。但し12月末日までお申し込みの方に限り創刊号無料サービス）

●申込方法

別刷の申し込みカード（ハガキ）にご記入の上、ご返送ください。アンケート回答用紙の返信用封筒に同封されても結構です。

●アンケートのお願い

編集部では、皆様の意見を反映した誌面作りをめざしています。別刷のアンケートにご協力くださることをお願い致します。



AIジャーナルについての  
お問い合わせは——

〒101 千代田区神田小川町3-28 立花書房ビル  
UPU内 AIジャーナル室  
編集部、読者サービス係、営業部まで

**(03)295-2341**(代)

**UPU** 株式会社ユー・ビー・ユー

本社/〒101 千代田区神田駿河台2-9 研究社ビル ☎(03)295-8560

●設立/1974年7月 ●事業内容/就職情報誌「What Next?」、企業の技術論文集「The INTER」等の刊行、企業PR業務全般、出版・イベントのプロデュース